砂漠(さばく)は生きていた

高田 勝

砂漠(さばく)は生きていた

高田 勝　著

福音館書店

ウチワサボテン

著者紹介

高田　勝（たかだ・まさる）　一九四五年、名古屋市に生まれる。両親とも日本野鳥の会の会員だったこともあって、小学校三年生のころから自然を見に、ひとりで出歩くようになった。一九五六年、上京。一九六七年、早稲田大学卒業。テレビ・コマーシャル制作会社勤務、林業雑誌記者を経て、一九七二年、北海道根室市に移住。牧夫生活などの後、一九七五年より、自然愛好者を対象とした民宿を経営している。著書に『ニムオロ原野の片隅から』（福音館書店）、『ある日、原野で』（朝日新聞社）、『野鳥』（講談社）、『雪の日記帳』（岩崎書店　第五回吉村証子記念科学読物賞受賞）などがある。

福音館日曜日文庫

砂漠（さばく）は生きていた

一九八九年四月二十日初版発行

著者　高田　勝

発行　福音館書店

東京都文京区本駒込六丁目六番三号　郵便番号一一三

電話（営業部）〇三-九四〇-一一二六
（編集部）〇三-九四〇-二二〇八

振替口座　東京五―一一七六四五

本文印刷　明和印刷
表紙・口絵印刷　共同印刷
製本　積信堂

NDC916／三六〇ページ／一九センチ

乱丁・落丁はお取替えいたします。

JOURNEY IN A LIVING DESERT
© 1989 Masaru Takada
Printed in Japan

ISBN4-8340-0870-3

もくじ

1 鳥キチ事始め 3
2 雑木林との出会い 15
3 師を得る 21
4 北海道移住 35
5 幻滅と停滞 43
6 アリューシャン列島への誘い 52
7 計画の変身と師との別れ 61
8 三人の同行者 74
9 シスコ上陸 82
10 不安なスタート 93
11 ソノーラ砂漠に入る 105
12 オアシスにて 117

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

13 生きものたちの知恵 133
14 チャックの反乱 143
15 ふるさと談議 162
16 カリフォルニア半島 176
17 砂漠と雑木林 186
18 カンガルーネズミの夜 209
19 長い一日 220
20 たどり着いた目的地 243
21 サボテンフクロウ 259
22 砂漠の猛者たち 270
23 緑の秘境 287
24 去りがたく、去った砂漠 310
あとがき 324

砂漠（さばく）は生きていた

1　鳥キチ事始め

五年ほどまえから、鳥を眺めに行く旅がしたくて、たまらなくなっていた。ふだん、鳥の多い、野鳥の宝庫とさえいわれている北海道の根室に住んでいながら、その思いは年を追うごとに強くなっていった。

根室近辺の鳥を見つくしてしまって、もう飽きてしまった、というわけではない。もしそうなら、鳥そのものに、もうとっくの昔に飽きていただろう。なにしろ、八歳のころから鳥好きになり、それが三十数年もつづいているのである。鳥の持つ魅力の奥深さ、幅広さは、自分でいちばんよく知っているつもりだ。

飽きるほど見てきたスズメやカラスだって、今でも新発見で心が躍ることがある。

つい最近も、スズメが飛んでいるトンボをみごとに捕らえたのを見たし、飛んでいるカラスどうしがぶつかって、一羽がバランスをくずして落ちかかったのを見た。日本でいちばん小さい鳥の一つで、体長が十センチ、体重が八グラムほどしかないヒガラという鳥が、巣箱をめぐって、自分より二まわりも大きいスズメと対等にケンカをしているのを見たときのおどろきも、新鮮だった。

要するに、自分勝手につくりあげていた鳥の世界の常識は、どんどんくつがえされ、知識の厚みは今でも増えていく。それがおもしろいと感じられるうちは、飽きることなど考えられない。

それでも、鳥を眺める旅に出たかった。眺めるだけで、ほかになんの目的もない旅に……そして、できることなら日本でなく……。

なぜそんなことを強く思うようになったか、なぜそれが日本国内の旅ではだめなのかをいうまえに、ぼくが鳥好きになったいきさつと、それが今日までどのようにぼくの生活とかかわってきたかについて、先にふれておいたほうがよいかもしれない。鳥とつきあうことは、ぼくにとっては呼吸をするのと同じくらいあたりまえのことになってしまっているが、はたから見ると、少しばかり常識外れでもあるようだから。

ぼくの鳥好きは、いつのまにかそうなったというのではない。今でもはっきりと、好きになったその日のできごとをおぼえている。

あれは、一九五三年の夏の終わりころだった。小学校三年生のときで、家のまわりでさかんにツクツクボウシが鳴いていたように思う。

名古屋市の外れの田園地帯で、家からさして離れていないところに八幡神社があり、ぼくは仲間と境内で缶蹴りをして遊んでいた。広い境内には木が多く、昼なお暗いという感じで、かくれんぼには絶好の場所だった。

何回か鬼が代わり、さしも広い境内でも、もう新しい隠れ場所を見つけるのは容易ではなくなっていた。

そんなとき、ぼくは一本のエノキの木に目をつけ、その木の上のほうのまたに腰かけて、じっと息をひそませた。境内から外へ出てはいけないという約束だが、木の上がいけないとは決められていない。

葉の陰に完全に隠されているので、鬼はぼくが見つけられなかった。だれに鬼が代わっても同じである。

そのうち、隠れているのがつまらなくなってきた。見つからないかわり、鬼のスキを見て缶を蹴っとばす楽しみもないのだ。

下へ降りようと決めて体を動かしかけたそのとき、目の前の枝に見たこともない小鳥がひょいととまった。・メートルと離れていない。そんな近くで鳥を見たことは初めてだったし、鳥とい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

えば茶色のスズメしか見たことのないぼくの目に、白と黒の目立つその鳥は、信じられないほどきれいに見えた。

どきどきしながらも、ぼくはじっと動かないままでいた。小鳥はぼくを無視したかのように小枝をチョンチョン伝い歩き、葉先で虫かなにかをついばんでいたが、来たときと同じように、ぷいと飛んで消えた。

缶蹴りのことなどすっかり忘れ、木をすべり降りたぼくは家に走った。一刻も早く図鑑が見たかった。

最初、初めて見た鳥だと思ったのだが、どこかで見たおぼえがあり、それが家にある図鑑であることに気づいたのだ。

当時、世の中に鳥の図鑑は今ほど多く出まわってはおらず、どちらかといえば珍しいといったほうがよかったが、両親が自然好きのわが家には、植物や昆虫の図鑑などとともに、鳥のものも、ちゃんとあった。

絵本のつもりで、小さいころから図鑑はちょいちょい見ており、植物のは標本を見ているようでつまらなかったが、鳥や昆虫の図鑑は、姿や形が生き生きと描かれていて、気に入っていた。

とはいっても、実際に野外で見た鳥を図鑑で調べるのは初めてのことだから、家に帰って父親の書棚から図鑑を引っぱり出しても、最初のページから順に見ていくしかなかった。

このページか、次のページに出てくるか……たしか、見たおぼえのある絵は右のほうを向いていたはずだ。――それは、わくわくするゲームのようだった。

何十ページ目かで、めざす絵が見つかった。見た鳥とまったく同じだった。名前は、シジュウカラと書いてあった。そして、絵はたしかに、右のほうを向いていた。

この発見は、ぼくにとっては一大発見であり、一大事であったが、その後で、もっとすごい事件が起きたのである。

夕方になって、父親がバイクでパタパタと帰ってきたとき、ぼくはいつものとおり、まず一瞬、その日の自分の行動に思いをめぐらし、しかられるようなことはしていないはずだとたしかめてから、口を開いた。

なにしろ、自分ではそれほどでもないと思っていたのだが、後になって聞かされてみると、相当な悪ガキだったらしい。自分でおぼえているのは、ラムネ工場で積んであるラムネのビンにレンガを投げつけたり、神社の舞台の屋根の銅板をはがしてクズ鉄屋に売りに行ったり（もちろん一人ではないが）、となりの家のモチノキの皮を全部はいでしまったり（トリモチをつくるため）、畑のスイカを失敬して底に穴を開け、中身をいただいたあと、元どおりに置いたり（二個や三個ではなかった）と、ささいなことばかりであるが、とにかく、年がら年じゅう、ほとんど毎日のようになにかやらかしてはしかられていたらしい。

夜中に外におっぽり出されるのなんかはしょっちゅうのことで、ときには物干しの柱にくくりつけられ、目の前に線香を立てられて、それが燃えつきるまで蚊にくわれるままにされたりもした。

とにかく、こちらが悪いにせよ、父親はきびしく、口より手が先のことも多かったから、いつのまにか父親の気配を感じると、本能的に「しかられるのではないか」と首をすくめるようになっていたのである。

そのときも、まず自分の一日の行状を考えてから、一大発見の話を持ち出したのだから、もう条件反射のようなものだ。

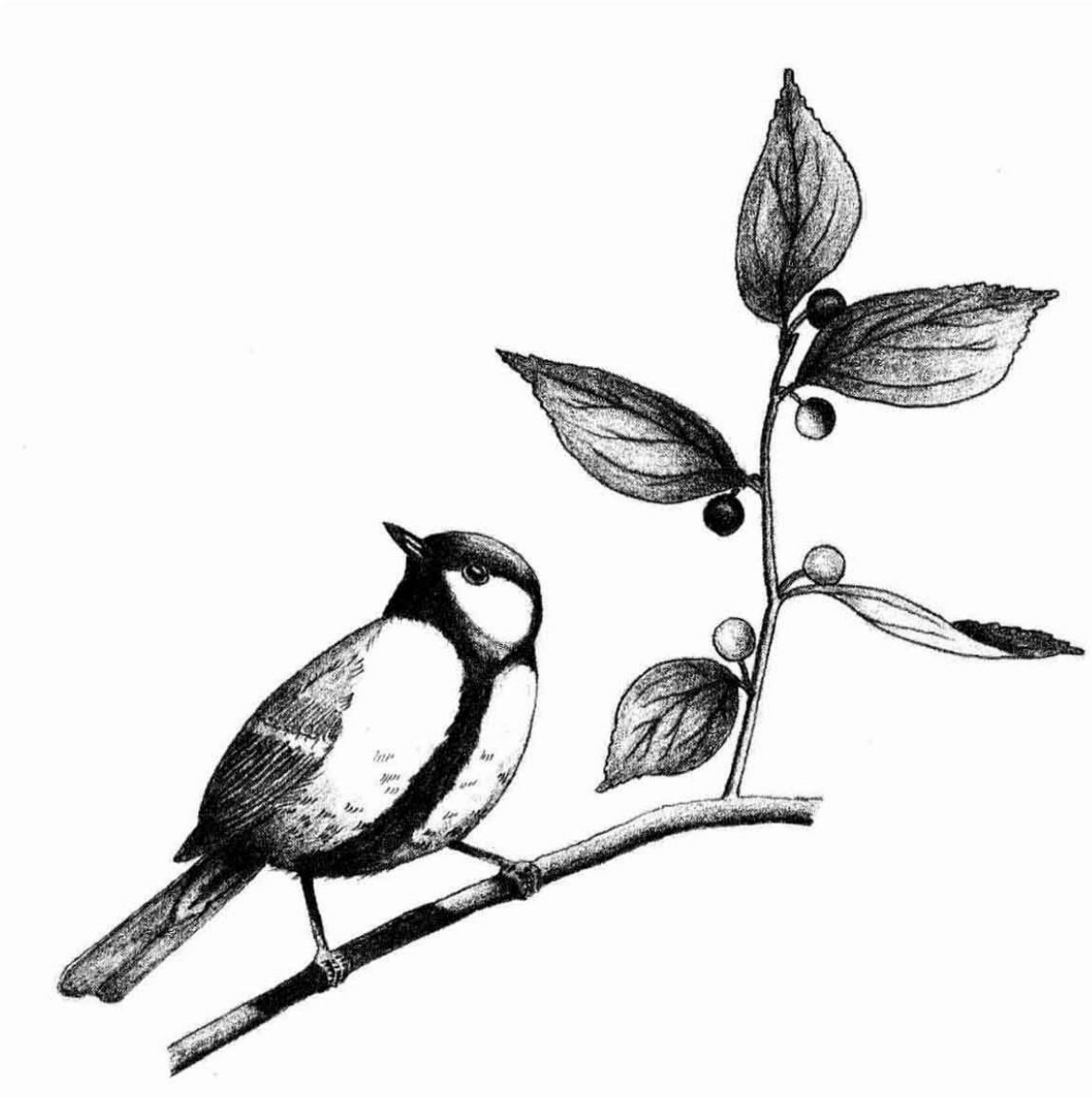
興奮して報告しながら、しかしぼくは父親に多くを期待していなかった。いつもしかられてばかりいるのだから、こちらの話を聞いてくれるだけで、じゅうぶん満足と思っていた。

ところが、話をだまって聞いていた父親は、聞き終わると笑顔になり、「そうか。よくそこまで調べたな。えらいぞ」と、ほめてくれたのである。

たったそれだけの、短いほめ言葉が、大げさにいえばぼくの人生を決めたといってもいい。

父親にしてみれば、シジュウカラなんて、なんの変哲もない、スズメと同じく全国にふつうにいる鳥にすぎなかったはずだ。

そのとき、父親が「ああそうか」と言ったとしても、ぼくにはそれでよかった。まちがって



エノキの枝のシジュウカラ

「なんだ、たかがシジュウカラか」と言ったにしても、少しがっかりしたくらいで、怒りはしなかっただろう。ともかく、話は聞いてもらえたのだから。

それが、思いもよらず、ほめてくれたのだから、ぼくにとっては一大事件であった。そして、そのもとはといえば、一羽のシジュウカラであった。鳥のおかげであった。

有頂天になったぼくは、もう翌日から、今でいうバード・ウォッチャー気取りで、かくれんぼのときはもちろん、魚捕りのときも、スイカ盗りのときも、鳥の影さえ見れば目を向けるようになっていた。

あわよくば、またほめられようという魂胆は魂胆として、その気になって鳥に目を向けてみると、これまで気づかなかったのがふしぎなくらいにさまざまな姿や形のものが実際にいることがわかるようになった。

そのかわり、経験の浅いことから、まだとても見方のコツのようなものはわからず、目についた一点だけを頼りに図鑑を開くから、とんでもない鳥が家のまわりにやたらに出てくることになる。

ミヤマホオジロという、ホオジロの仲間の鳥がいて、名古屋のほうには秋になるとよくやってきた。黄色っぽい鳥で、目のところによく目立つ、黒い帯がある。この黒い部分だけが目について図鑑を開き、小笠原諸島にしか住んでいない珍鳥メグロだと思いこんでしまうのである。メグ

口は、その名のとおり、目のところに黒い部分があり、全体にはやはり黄色っぽい。しかし、今なら、たとえ同じ地域で見られたとしても、まちがえようがないくらいに両者には差がある。

あるいは、アオジという鳥がいて、これも胸のあたりの黄色い鳥だが、いつもヤブの中にいて、全身を見せてくれない。いきおい、その黄色い部分を見ただけのことで、カナリアをたしかに見たのだと言い張って、親を閉口させるのだった。

しかし、当時の名古屋のぼくの住んでいたあたりは、丘陵と水田の広がる、まだまだ自然のたっぷり残されていたところで、鳥に興味を持ちはじめた人間にとって、それを広げるなり深めるなりしていくには絶好の環境だった。

とくに、水田地帯を流れる天白川のむこうの、相生山脈と呼ばれていた低い丘陵地帯は、秋ともなると無数の渡り鳥の通り道となるところだった。

その相生の山の中に、野並と呼ばれているところがあり、そこに一人のじいさんが住んでいた。川村さんといったが、河村さんだったかもしれない。

このじいさんは、毎年、秋の渡り鳥のころになると、裏山の稜線にカスミ網を張りめぐらせ、たくさんの鳥を捕らえて、料理屋などに売っていた。もちろん、当時すでにカスミ網の使用は違法だったが、食糧難のころでもあり、だれもうるさく言う人はいなかったようだ。

川村のじいさんは、夏には発電機を背負って近くの川に行き、川底の泥穴にひそむウナギを電

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com